



## 孔雀 我が家の風景(孔雀/PEACOCK)

2007(平成19)年3月16日鑑賞&lt;東宝東和試写室&gt;

監督=顧長衛 / 出演=張靜初 / 馮瓚 / 呂玉來 (キネティック、アルゴ・ピクチャーズ配給 / 2005年中国映画 / 143分)

……『山の郵便配達』のように、いかにも中国の良き風景をしっかりと描いた名作が誕生！ といっても、これは地方都市における5人家族の風景。時代は1977年から1984年。文化大革命が終わり、改革開放政策に大きく移行する過渡期の、ある意味中国が最も平穏だった時代……？ 優しい両親と共に路地裏で貧しい食卓を囲むのは、知的障害のある兄、感受性の鋭い妹、そしてやりきれない思いを抱く弟の3人。7年後、姿を変えたそんな家族たちが孔雀の姿に見たものは……？

チャン・チンチュウ  
張 静 初は『セブンソード』のあの女優！

ツイ・ハーク  
徐 克監督の『セブンソード』(05年)は、私の大好きな映画。波瀾に満ちた物語と多くの登場人物のキャラを忘れないため、私はその評論を「第1部 坂和流あれこれの視点」「第2部 坂和流ストーリー紹介とキャラ紹介」に分けて詳細に書いた(『シネマルーム9』38～52頁参照)。『セブンソード』には、楊采妮と金素妍という2人の美女の他もう1人、天地会の指導者の娘、劉郁芳役として張静初が登場した。

そこで、あらためて張静初の経歴を調べてみると、1980年生まれの彼女は13歳で福建省芸術師範学校に入学し、1997年に中央戯劇学院監督科に進学。そして、卒業公演の舞台でヒロインを演じ、時にコマーシャルに出演したものの、女優になることは考えていなかったとのこと。

中央戯劇学院監督科を卒業した張静初が『セブンソード』で女優として起用さ

れたのは、彼女の『孔雀 我が家の風景』での演技が高く評価されたためとのこと。したがって、『セブンソード』への出演が後で、『孔雀 我が家の風景』への出演が先、すなわち彼女の映画初出演になったのが『孔雀 我が家の風景』というわけだ。

中国では、第2の章子怡<sup>チャン・ツイイー</sup>、ポスト章子怡<sup>チャン・ツイイー</sup>と呼ばれる女優が多いが、彼女もその呼び声が高い女優の1人。今後も次々と出演作が控えているとのことだから、注目しなければ……。

## 長男も監督科、そして映画初出演！

『孔雀 我が家の風景』を描くうえで、主演女優の張静初<sup>チャン・チンチュウ</sup>以上にポイントになるのが、幼児の頃の脳感染が原因で知的障害を負っているという長男のカオ・ウェイクオ<sup>ファン・リー</sup>（馮 瓏）。このウェイクオは、結婚相手となった足が不自由な農家の娘ジンズイから、「子供の頃からそんなに大きかったの？」と質問されるほどの巨漢で、イメージとしてはあの放浪の画家、山下清をひと回りデカくしたような感じ……。ところが、こんな知的障害のある巨漢ウェイクオを熱演する馮 瓏<sup>ファン・リー</sup>は、張静初<sup>チャン・チンチュウ</sup>と同じく中央戯劇学院の監督科を卒業した逸材！

なぜ、ウェイクオが物語の上でポイントになるのかというと、知的障害を負っている彼はどんな仕事についても失敗ばかりで長続きせず、またどんな職場でもバカにされいじめられており、いつも何らかの事件に関わるため。またそんなウェイクオだから、逆に両親は3人の兄妹弟の中で、1番大切にしているから、妹のカオ・ウェイホン<sup>チャン・チンチュウ</sup>（張静初）や弟のカオ・ウェイチャン<sup>ルウ・ユウライ</sup>（呂玉來）にしてみれば、それが気に入らない面も……。したがってある時ウェイホンとウェイチャンは、ネズミ駆除の毒薬をウェイクオに飲まそうとまで……？

顧長衛<sup>クー・チャンウェイ</sup>監督は、そんなウェイクオを軸とした波瀾に満ちた(?) 5人の家族のさまざまな風景を静かに描き出していく。

## 中国が最も中国らしかった時代……？

顧長衛<sup>クー・チャンウェイ</sup>監督が描こうとするのは、1977年という時代設定の下で、地方都市で暮らす庶民の姿。1966年から1977年まで11年間続いた文化大革命がやっと終わったところからのスタートだ。改革開放政策を打ち出した鄧小平をリーダーとする新生中国が1978年にスタートしたが、この時代の中国はまだすべてが貧しく、スクリーン上

に再三登場するのは、路地裏で食卓を囲む家族の姿。

現在産経新聞に『鄧小平秘録』が連載されているが、これは1989年の天安門事件を頂点とする、鄧小平にまつわる秘録が満載されているから、実に面白い。鄧小平による改革開放政策が急激に加速されたのは、1992年の「南巡講和」以降。そしてこの映画のラストは1984年の冬、それぞれ姿を変えた家族が動物園で孔雀をみるシーン。なかなか羽根を広げない孔雀が人間たちが去った後、やっと大きく羽根を広げるという印象的なシーンで終わる。

このように、顧長衛監督クー・チャンウェイが家族の風景を描くために設定した1977年から1984年までの時代は、私なりに誤解を恐れずにいえば、1949年10月に成立した中華人民共和国が、とりわけその地方都市が、最も平穏で最も中国らしかった時代……？

### ウェイホンは早く生まれすぎ……？

この映画を観る限り、ウェイホンは田舎娘であるにもかかわらず、自我意識や感受性が強く自由に憧れすぎているため、地方都市の慣習に染まることができずに苦勞しているよう……？ 思春期の女の子には誰にでもその傾向があるが、ウェイホンの場合はそれが強烈……。したがって、毎日工場で瓶を洗う仕事は退屈で嫌だし、保育所での画一的な仕事にも身が入らない……。面白いのは落下傘部隊の将校に出会って一目ボレし、入隊を志願したがダメとなり、拒食症になってしまうというエピソード。いかにもカンの強い女の子のやりそうなこと……。さらに面白いのが、自前のパラシュートをつくり、それを自転車の後部につけて町中を走り回るシーン。これを偶然町で見かけた母親は……？

その他、このウェイホンがみせる突飛な行動が笑いを誘うが、実はそれは、あの時代の感受性の鋭い若者たちが一様に持っていたであろう不満の現れ……。もしウェイホンがあと10～15年遅く生まれ、改革開放政策の時代に青春時代を過ごしていれば、全く違う人生になっていたはず……。そう考えれば、こんな感受性の強いウェイホンは少し早く生まれすぎ……？

### 弟も姉に似て

父親の言葉によると、3人の兄弟弟の中で、弟のウェイチャンが1番頭がいいらしいが、実はこのウェイチャンも姉に似て、感受性が強く傷つきやすいナイーブな神経

の持ち主のよう……。彼の最大の悩みは、知的障害のある兄をもったことによって、さまざまなトラブルに巻き込まれること。顧長衛監督は巧みにそんなエピソードを折り込んでいく。

また、親切にしてくれた隣の席の女の子に恋心を抱いたのに、「誤解しないでね。同情しただけよ」とピシヤリとはねつけられて落ち込んだり、教科書の間にスケベな絵を挟んでいたため、父親を激怒させたり、普通は1番下の弟は要領よく立ち回るものだが、ウェイチャンはその逆……？

その結果、ウェイチャンは父親から勘当されてしまう羽目に。そして再び家に戻ってきた時は、サングラスをかけ、子連れのと一緒という大きく変わった姿。しかもすっかりヤクザ風になった彼の右手の指は……？ 両親は何も言わず、そんなウェイチャンを再び受け入れたが……。

## しつとりと描かれる家族の姿を堪能

この映画は、張藝謀監督の『紅いコーリャン』(87年)、陳凱歌監督の『さらば、わが愛／霸王別姫』(93年)、姜文監督の『鬼が来た！』(00年)などで撮影をつとめた、「中国で最も有名な撮影監督」と言われる顧長衛監督の初監督作品。そして、その狙いは、タイトルどおり。家族の心配の種だった長男ウェイクオはしっかり者の嫁と結婚したのが良かったようで、2人で始めた屋台は結構繁盛し、今や立派に1人立ち……。

他方、突然運転手の男性と結婚すると宣言して両親を驚かせたウェイホンは、今は離婚して両親と共に生活中。これもよくある話だが、いずれ再婚して子供をつくるかも……？

そして弟のウェイチャンも子供の世話をしながら、歌手をしている妻と共に何とかうまく生活しているよう……。しかし残念ながら、今、父親は死去。そりゃ時が流れていけば仕方がないが、母親はなお健在だ……。

1977年という時代に貧しい食卓を囲みあった5人家族は、今1984年の冬、それぞれその姿を変え、それぞれの思いをこめて動物園に……。そしてそこで見たものは……？

2007(平成19)年3月17日記